

地域の現実に学び、 社会に通用する人材を育てる 地域づくり研究会。



研究室訪問
人文学部

「地域づくり研究会」の発足は平成21年11月とまだ歴史は浅いものの、蔵王温泉や長井市、宮城県七ヶ宿町等、さまざまな地域で活動を行っている。特に、平成21年3月に人文学部と蔵王温泉観光協会の間で地域連携協定が締結されたこともあり、蔵王温泉との関わりは深く、今回も「蔵王温泉環境景観美化計画」を提案。計画の実施期間は平成23年度から3カ年、地域の人々と一緒に計画を実施し、誘客の拡大や地域発展に結びつけたい考えだ。「行ってみる、会ってみる、やってみる」が身上の「地域づくり研究会」の蔵王温泉での活動に注目してみた。

研究会活動を通して、 本気で学び始めた学生たち

「地域づくり研究会」の拠点となっている地域連携室を訪れると、学生たちが次々に名刺交換にやってくる。社会で通用する人材を育てることを最終的な目標としているこの研究会では、学生にも社会人としての言動や作法を徹底しており、名刺交換もその一つだ。学生メンバーは15名ほどだが、この日、地域連携室に集まっていたのは3・4年生7名。「もっと山形のことが知りたかった」「就職活動に役立つと思って」等、入会の動機はさまざまだが、誰もが活動を通して学ぶことの意義に目覚め、地域づくりそのものにやりがいを感じるように



村松 真
むらまつまこと ●地域づくり研究会・世話役兼指導教員(地域連携担当助教) / 元金山町職員。東北大学農学研究科に社会人入学し、街づくり計画を研究。各地に出向き地域づくりを実践的に指導。

なっていったという。

指導教員の村松先生は、「就職試験の面接対策として地域づくりについて机上で学んだだけの学生と、うちの学生たちのように実際に地域に足を運び、地域の人々とふれあって、実践的に学んできた学生とではまったく違います。話をすればすぐにわかるはずです」と、所属学生たちの成長ぶりに満足げな表情を見せていた。

元気復活は景観美化から、 蔵王温泉の変化を後押し



蔵王温泉観光協会の人々と学生と一緒に温泉街を歩き、街並みの問題点を指摘。美化運動で取り組むべきポイントについて説明を行う村松先生。



北川 忠明
きたがわただあき ●地域づくり研究会・顧問兼指導教員(法経政策学科教授・地域連携室長) / 京都大学法学部、名古屋大学法学研究科出身。専門は政治学。講演会や地域づくりへの参加実績も多数。

地域づくり研究会の蔵王温泉における取り組みは、2009年の夏に行われた蔵王音楽祭「龍岩祭」のボランティア活動から始まった。その翌年の蔵王温泉開湯1900年祭では「山大地域づくり部会」として実行委員会にも名を連ねた。それらの実績によって厚い信頼関係が築けたこともあり、蔵王温泉観光協会から地域づくり研究会に対して温泉街の誘客拡大と地域の発展を目的とする計画策定が依頼された。

村松先生と学生等は何度も温泉街を歩いて現状調査を行い、閉鎖した旅館や店舗がそのまま放置され、汚れた外壁の建物が多いことなどに気付いた。街並みに対する美化意識をきちんと持つことが出発点として、「蔵王温泉環境景観美化計画—蔵王温



蔵王での景観・環境研修会。地元の人々と温泉街の街並みを検証し、問題点とその改善点を話し合うことで美化意識を高める。計画を成功に導くための大切なプロセス。

泉開湯1900年祭からはじまる景観美づくり—」を冊子にまとめて提案。平成23年度から3年間、提案内容を活用し地域の人々とともに街の掃除や研修会を定期的に行っていくことになっている。

地域づくりの極意は、最初の取り組み事業(出発事業)を手軽で手頃なものにすること。いきなり景観づくりは難しいが、美化運動なら馴染みがあるから取り組みやすいというわけだ。しかし、今まで通りの美化運動ではいくら片付けても一瞬でもとに戻ってしまう。景観づくりを意識しながら

美化運動を行うことで、問題点がわかり、次にやるべきことが見えてくるのだという。

地域貢献はまだ先の話、 謙虚な気持ちで地域の中へ

崩壊集落やシャッター商店街等、地域のリアルな現実を目の当たりにし、そんな地元を何とかしたいと切望する住民と出会い、大学で学ぶ真の意義を見つけたという学生も少なくない。もっと本格的に地域づくりを学びたいと、大学院への進学を決めた学生もいる。地域づくり活動を通して学生たちが学んでいるのは知識ではなく、その先にある知恵。そして、さまざまな事態に対応できる応用力を身につけることで、社会に出てすぐに役立つ人材へと育てい



下平 裕之
しもだいらひろゆき ●地域づくり研究会・副顧問兼指導教員(法経政策学科准教授) / 早稲田大学政治経済学部、一橋大学経済学研究科出身。専門分野は経済学史。公開講座や調査活にも参加。

くのだ。「地域づくりに学生の参加を求めるケースが増えていますが、地域の人々が期待するほどすぐに貢献はできません。勉強させてもらうという謙虚な姿勢で地域に入っていくように学生たちには話しています」と村松先生。それでも時たま、学生ならではの大胆さや無鉄砲さでホームランを飛ばすこともあれば、学生たちが地域に入っていくだけで活気が生まれるといった効果があることも事実。学生たちの活動・活躍の場はこれからも広がっていきそうだ。



蔵王温泉開湯1900年祭では準備段階から参加し、「山大地域づくり部会」として実行委員会にも名を連ねた地域づくり研究会。運営会議にも出席し、住民と意見を交わした。